

著者も御存知のとおり、「遠野物語」ならば、一九九七年に後藤總一郎監修・遠野常民

大学編著『注釈遠野物語』、二〇〇〇年に拙著『図説遠野物語の世界』『遠野物語の誕生』がある。昔話研究で言えば、二〇〇〇年に川森博司著『日本昔話の構造と語り手』、二〇

二年に拙著『遠野の民話と語り部』が出ている。それらばかりでなく、遠野市立図書館・博物館や遠野物語研究所の活動によつて、すでに従来の研究は大きく変わってきてる。しかし、そうした蓄積は、本書ではまったく「無視」されている。

これまで遠野で重ねてきた研究の経緯を考えるなら、ここに来て一〇年前の状況に引き戻されたくない、というのが私自身の正直な感慨である。そして、「提言」を述べるのならば、その声がしつかり届き、議論ができる場を作つてゆく必要がある、とも思う。政治や経済、産業ばかりではなく、学問においても自己責任が問われる時代がもう来ている。著者には是非、自分のために遠野を使うのではない学問のあり方を問いつづけてほしい、と願つている。自戒の思いも込めて、改めてそう述べておきたい。

(岩田書院、本体八八〇〇円)

書評

兵藤裕己著 『物語・オーラリティ・共同体』

藤井貞和

二十二本の論文からなる。そのうち七本は、う。

旧著『語り物序説』（一九八五、有精堂）から改稿され、新著『物語・オーラリティ・共同体』にはいつてきた。よつて本書の副題を「新語り物序説」という。

主著は『平家物語の歴史と芸能』（吉川弘文館、二〇〇〇年）である。内容が大きく重なるから、本格的にはその『歴史と芸能』のほうで、兵藤の「物語」も、「オーラリティ」も、「共同体」も、議論に供されるべきだろう。新著『物語・オーラリティ・共同体』は、主著を編むかたわらで、旧著の出版社が活動を停止したこともあるって、休業させてはなるまいという思いもあつたろう、併せて刊行が試みられた。けつして副産物的な書ではありえず、オーラリティという語が目に飛びこんでくるこの新しい著述に対し、われわれが気新著だと、III「歴史／語りの構造」のうち

に、iii「歴史／物語の構造——平家物語の語

三題はなしではないが、「物語」「オーラリティ」「共同体」のうち、「物語」はこれまで議論されてきたところを踏襲する。「共同体」についてはIIのii「語り物享受と共同体」に、永積安明論として特にあって、「享受」という研究者主体を批判する、歯切れのよさが、読み返してなつかしい。しかし「オーラリティ」はどうなのだろうか。本書のうちに、本論のどこにも説明文を見ることができなくて、わずかに、あとがきというはみ出し部分において「口承」を批判し、オーラリティをキーワードにするのだと言う。そこを気にしながら

繙読してみよう。

旧著『語り物序説』の一つの中心は「平家物語の語りの構造——発生論的に——」で、

り」として收められる。旧著のほうでは、物語の「物」は靈だ、というような、折口信夫の「學説」に拠っていた。折口そのひとが実証できていない學説ではないか。それを鵜呑みにした「モノ語り」説が前提に敷かれてあつた。その「モノ語り」を締めつけ、ヨミの本文への表現的、質的な転位に、読み本平家の成立がある、と論じられた。歴史と物語とのあやうい「反転」、あるいは反転しきれぬところに「位相」をもとめて、旧著はそれを平家成立としていた。歴史を裏返す語りの位相ということも、ある意味でよく論じられていて、明快だつたと称してよからう。それだけに、成り立たぬはずの折口説を前提に論じすすめるその手づづきに対し、私は（＝藤井）などからのはげしい反論をうけざるを得なかつた。

退させられ（そのこと 자체はよろしいとして）、反転、あるいは「転位」、位相といった、類同する語の曖昧さをまといながら、依然として原初の語りの実態は、懸案であるかのように課題のままに置かれて、「ものがたり」は発生状態において奪回可能かと問われ、それが著者が「オーラルな物語（語り物）」にこだわる理由（二二三三ページ）だ、と収めら
れる。

いりこまなければ、なかなかつけることのできないこまなかつた見だしではないか。『国文学』の起源」という見だしもみつけることができる。やはりこのごろの関心、好尚をふまえると見てよからう。「怨靈（モノ）の鎮め」「モノ語り」と言つたような、安易な言い回しは巧妙に消しさられ、延慶本の扱いも微妙に変わつてしまふ。

I 「物語テクストの政治学」にもどうう。「語り物、物語論のかなたへ」(『国文学解釈と鑑賞』一九八一年五月号)が、本書の巻頭に、「物語テクストの成立」と題して置かれれる。「改稿」とあるけれども、変わりきった。というべきかもし氏から指示されないならば、おなじ論文であるとはとうてい気づくこ

それでも初出が「語り物・物語論のかなたへ」であったと主張するのは、その後の二十年にわたる、兵藤理論のすべてにおいて、いかに不本意であったにせよ、その初出稿（おもとこし）（『語と国文学』一九八〇年九月号）に、基本的な考え方が出そろっていた、というつよい思いが、いれがあるからだろう。

一旦、発表されてしまった論考は、不本意な場合、若書きであればあるほど、改訂のチансスが来るまで、著者のなかで、いつまでも死にきれず、いやむしろ成長して、想念の世界へ

「モノ語り」がなりたたぬなら、論考としてはそれまでのことかというと、そんなことはない。新著でも、兵藤の基本構想は、当然のことのように、変わらない。成立当初に抱わされた、「平家怨靈の慰撫」という機能を背負つて、原テクストがあり、民衆教化の台本としてはヨミ本というのにふさわしい、といふ。しかしながら、「モノ語り」説が、後

とができなかつた。それでも「語り物、物語論のかなたへ」から「物語テクストの成立」へ、改稿したおなじ論文だと、著者は主張する。

一旦、発表されてしまった論考は、不本意な場合、若書きであればあるほど、改訂のチャンスが来るまで、著者のなかで、いつまでも死にきれず、いやむしろ成長して、想念のうちで書き直されつづけて、後日へひきずる。兵藤の場合、論文たちは、幸いにも、リニューアルの好機に際会して、新装開店ではないが、みごとに現在のヴァージョンへと再生することことができた。その意味でこの著はしたた

かに生き延びる、その根底に感傷性があることを隠していない。

ii 「物語・語り物とテクスト」は、いま言った『国語と国文学』論文で、いまの兵藤理論の骨格をなす。「平家物語」というへ書かれたテクストがあるのではない」と、繰り返し、繰り返し兵藤氏は確認する。なぜ、執拗にこの確認をしなければならないのか。従来の平家研究者への、異議申し立てであることはそれとして、予感されるテクスト論時代の到来によって、いわば発生論ないし中世平家の実態が、等閑視されてゆきそうな勢いにあることへの、危惧の表明だろう。テクスト論はいわば目のまえの「テクスト」をつねに起點とする楽天性を免れない。「ないテクスト」から出發せざるをえない兵藤の悲劇性と、その点できわめて対照的ではないか。

氏は、意図的と言つてよいほど、柳田國男

（『物語と語り物』など）への共感をあらわにする。カタルとヨムという対立は、口演的なヨムの原型ないし以前に、カタルという言語行為を見通し、カタルからヨムへの「転倒」を見定めるために、どうしてもそこに分け入る。なかなか実証しえない実態としての中世カタリは、かえつてテクスト論者を元気づかせてしまつた昨今かもしれない（成立論者をいつまでも諸本論へくくりつける理由でもある）。カタリのカタはカタドリ（像り）のカタだ」という、『岩波古語辞典』（大野晋ら）が増補版で撤回したはずの説を、兵藤がまだ捨てていないのも、何らかの弱点があらわれだ。けれども、兵藤氏を除く『平家物語』研究の水準が、正典（カノン）をうたがうことなくそれを起点としている大勢である。現在でもそうなのではなかろうか。いわばそういう「国文学」としての研究に対し、氏の場合、「口承文学」としての『平家物語』を対置させてみせるという戦略であつたことにはいわば目のまえの「テクスト」をつねに起る。

iii 「物語がつくる歴史」（副題「源氏物語と平家物語」と、iv 「語りの威力と拘束」とは、足利政権下に、平家語りの管理がすむさまを考察する。平家の没落・滅亡とは、とりもなおさず「源氏」の繁栄を約束する神話であり、覚一本の正本が將軍家へたてまつられる根柢を形成する、という。権力とむづびつて当道のいわば正典化がおしすすめられるとは、逆に中世の平家演唱の、オーラルの（口頭的な）実態が、いかに生成的、流動的であったかを示している、という見通しだろ

う。vi 「武家神話としての平家物語」はその統編。

美津子、薦田治子氏らの音楽学との協力関係にみちびかれた面もある、今日での成果だらう。

II 「物語の定型、共同体の生成」は、語り手論であるとともに、語り手を引き受ける、いわば現代の読み手もまた位置取りをもとめられるといふ、八十年代兵藤の位相を熱っぽく解き明かす論文群による。i 「物語——触穢と浄化の回路」、ii 「語り物享受と共同体——国民文学論をめぐって」、iii 「平家物語の発生と表現——儀礼の構造」、iv 「死と鎮魂」からなる。

これらはIV 「語り手はどこにいるのか」という、さいごのパートの大小の論文群と対応するので、それらをも見ておくと、「巡礼・回国の起源」は、粉河寺に出入りする中世信仰生活者のあとを、伝花山院詠のうたのうえに尋ねる。「山立」という語をめぐるのが、iv 「山民の伝承、非常民の物語」である。v 「婆娑羅と悪党」は、副題を「小島法師の問題」という。vi 「語ることと読むこと」は、ヨムという語にあらためて迫り、語り物伝承における、題目をヨムことからモノガタリへ移行する過程を解明せんとする。この課題はまだまだ発展するのではないかと思われた。

vii 「物語の語り手と女性」は「浮舟の物語へ」と副題し、死ねない『源氏物語』の女主人公の行く末までを見届けようとする筆力は

読み応えがある。靈物（モノ）の語りだ、というようなのは証拠のない俗説であろうが、物語が中世的にいわゆる「本説」「本縁譚」のかたちを取る、ということに異存はない。

III 「歴史」語りの構造のiii 「物語と辯境」は平将門、iv 「歴史」の伝承」は「陸奥話記」から「超古代史」にまでひろげる。

オーラリティ、あるいはオーラルという語は、「□承文学とは何か」（平家物語の歴史と芸能）所収、初出は『岩波講座日本文学史』十六、一九七七年一月）において位置づけられた、本書ではもうふれたように、あとがきに見られるほか、比較的新しい論文、I—iv

「語りの威力と拘束」に「口頭的な」のルビとしてオーラルと見える。これもふれたように、III—iii 「歴史／物語の構造——平家物語の語り」のしめくくりに、「私がオーラルな物語（語り物）にこだわる理由」とあつた。しかし初出には「語り物レベルにこだわりた

て完成させたことができるではあるまいか。

もとより、言語現象のなかに文字活動や文字伝承が生じてから、オーラルな自覚がある種の危機感を生じたり、盲人芸なら盲人芸の結束性のなかにつくなる、ということだろう。とするなら、兵藤氏の場合、初出の「語り物レベル」のままでも、その限りでは用語としてよかつたはずであろう。オーラルであることには、より広範に、村落レベルや都市伝説をもふくむ民間説話（昔話）にも視野をおしひろげて、さらなる考察がおしすすめらることは、わかるに衆知のように氏は民間説話（昔話）（の研究）に対しきわめて冷淡であるよう見える。そのこととオーラルを論じることとがどうむすびつくのか。むしろ「わざ（態）」＝行為のうちに口頭性もされることをふまえ、言語行為の積極的なありかたとして「語り物」から「民間説話」までを一望できる視界を切り開きたいものである。無い物ねだりであろうか。

（二〇〇二年三月 ひつじ書房

（ふじい・さだかず／東京大学）
本体二八〇〇円
が本書の特色であるなら、そういう観角から

の新稿を用意してこそ、二〇年の歳月をかけ